



## 洋光台文化を創る会のこと

- 三上 洋光台男声合唱団ができるのと同時ぐらいに洋光台文化を創る会ができたと聞いている。洋光台誕生10周年には、洋光台の文化を創る会はあった。
- 五十嵐 先日お亡くなりになった中野堅五さんが音楽と文化を愛されていて、洋光台文化を創る会をつくったと聞いている。
- 森野 洋光台誕生10周年を記念して街の歌をつくることになり、1980年に歌詞を募集して、曲をつけて1985年にこども科学館で発表した。そのときに洋光音頭もつくられた。街の歌を作って、街の踊りをつくった。これの後に、磯子区の歌ができています。
- 三上 当時、洋光台は北団地が出来ていて、そこに住む人が歌や踊りをつくった。
- 森野 洋光台は、新しい街で、第1期生から始まったので、自分たちの文化をつくる、自分たちの歴史をつくるという気概が強かったのではないかと。もともと古い街では先輩がいて「なに若いものが」と言われるが、洋光台が開かれて、高度成長時代に、新しく出来た洋光台に意気揚々として来た現役の人たちが、自分たちの街をつくらうというのが他の街と違うところ。うるさい先輩がいないから、恵まれていた。
- 三上 10周年の頃に洋光台のマークもつくられていて、それが始まりで

- 街の歌もつくられた。
- 五十嵐 働き盛りの人たちが仕事に通いながら、一方で自分たちの文化をつくっていかうとしていて、合唱団がいくつもあって、本当にすごいなあと思っていた。
- 森野 その年代の人たちは大学でハモニカやったり、合唱やったりしたなど活動的な人が多かった。あと20年遅かったら、どうだったか。
- 五十嵐 他に娯楽がなかった時代で、そのことが良い方向につながった。
- 三上 10周年から30周年までは、洋光台をあげて盛り上がっていた。その周年行事の目玉がパレードで、当時は、洋光台通を通行止めて、パレードができたので、各周年行事ではそれを目標にしていた。
- 森野 我々が知っているのは、30周年(2000年)の洋光台通のパレードが盛大だったこと。これはユーチューブで見ることができる。その時に踊っている人が、各町内会の夏まつりの盆踊りの師匠で教えてくれていた。
- 三上 30周年のパレードは、トップを県警の音楽隊、しんがり消防の音楽隊、この二つの音楽隊が同時に出たのは、初めてだったのではないかと。西公園から出発して、広場公園が終わりまで、この間切れ間なくパレードが続いて、いろいろな団体がでていた。

## 洋光台音楽のつどいのこと

- 五十嵐 コロナがあって、今年4年ぶりに洋光台音楽のつどいをやろうとしたとき、1回止めたものを始めるのは本当に大変で、みんなで歌を練習することができないので、小学生は参加できないと言われた。場所なら貸すと言われて、今年は洋光台第二小学校の体育館を借りて、今までに音楽のつどいやにぎわいフェスタ、梅の里まつりに出てくれた団体に声をかけて、大人の合唱団と子供はダンスの有志のサークルなど12団体に出てもらった。音楽のつどいという名前ではできなかったのですが、音楽フェスタと名前を変えて実施した。



五十嵐さん

- 三上 音楽のつどいは30周年が転機だった。30周年までは、学校の参加はなかった。当時、学校は地域活動に参加しないというのが一般的で、協力してくれなかった。30周年だからということで、なんとか各学校を説得して、生徒に出てもらい、磯子公会堂で実施した。それまでは、男声合唱団、混声合唱団、うらら会、少年少女合唱団、ピリカ、PTAの合唱団などたくさんあって、洋光台第一小学校と洋光台第二小学校を交互に借りて、洋光台音楽のつどいを実施していたが、生徒は参加してもらえなかった。30周年以降は、毎年出てもらえるようになった。

- 五十嵐 洋光台音楽のつどいは、本当に素敵な催しで、今は、音楽のつどいを経験された先生がほとんどいないが、保護者の方からは、音楽のつどいは本当によかったと、再開してほしいという声がある。
- 坂本 私も初めて音楽のつどいを聴きに行ったときに洋光台第二中学校の木琴部の演奏がとても素晴らしく、磯子区の皆さんみんなに聴いてもらいたいと思った。

- 五十嵐 今、その木琴部が危機に瀕している。かつては音楽のつどいで木琴部の演奏を聴いた小学生が中学で木琴を始めという流れがあったのが、コロナで聴く機会がなくなって、木琴部の部員が減っている。

- 坂本 木琴専門の先生がいらっちゃって、異動しても指導しに来てくれたという話を当時間いた。

- 森野 今指導してくれている先生についても学校運営協議会から要望して、ルール上可能な範囲で残ってもらっている。文化の流れがコロナで途絶えたときに、どうするか、いい見直しの機会になっているはず。音楽のつどいは何とか復活させたい。コロナで、学校で歌を歌うこともできない、お話もできない。でも、入学式、卒業式で歌う子供たちの歌に心がこもって、すごい。これを何とかしたいと思った。コロナ禍でも学校単位で動画に撮って、上映できないとか検討したが、なかなか実現できなかった。



森野さん

- 森野 50周年記念誌をつくるにあたって、各団体の活動が衰退している状況があって、そんな中で、こどもフェスタをやったらどうかと

- いう話がケアプラザの湫谷さんから出てきた。にぎわいフェスタの拡張版。コロナで中断したもののなかから、新たに生まれた。今までと同じものではなくて、違うものを組み替えながらやらないと長続きしない。自分たちの発表の場は自分たちで作りなさいという思いだ。

- 五十嵐 音楽フェスタの開催にあたって、代表者に集まってもらったが、前のように参加してあげるのではなく、本当に参加したい、発表の場が欲しい、ということがすごく伝わって来て、皆さん会場の準備から当日の運営までとても協力的にやってくれて、この流れを次に生かせるかなと思っている。

- 坂本 音楽のつどいから音楽フェスタ、にぎわいフェスタからこどもフェスタと、名前は変わっても受け継がれていくことが、コロナをきっかけにできている。

- 森野 文化というくりだが、街づくりでもある。地域の魅力づくりで、子どもたちが活躍できる場、この街で子供を育てたいと思ってもらえる街にしたい。子どもたちが元気に活躍できる場をいっぱい提供して、それを眺めている年寄りがいる街にしていきたい。

- 三上 学校の存在は、街にとって重要。

- 森野 学校も昔とだいぶ変わって来て、地域と溶け合うことができるようになった。洋光台は、4校の小学校と2校の中学校全てが洋光台という名が付いていて、かなり前からやっている洋光台地区青少年育成協議会主催の6校歓迎迎会も学校との絆、一体感を強めている。ケアプラザも洋光台の一つ。

- 三上 6校歓迎迎会は相当前からやっている。青少年育成協議会主催なので、各自治会町内会も加わってくる。

- 森野 コロナで途切れていたのを、今年顔合わせ会という形で復活した。顔のつながりができてくる。まず人間関係ができたうえで、文化のかなという気がする。

- 音楽のつどいについても、あの元気な一生懸命歌う子どもたちを何とかしたい、子どもたちを育てていくために地域の責任として何とかしたいという思いがある。磯子公会堂や杉田劇場などキャパのかいところで歌わせたい。観客が入れられなかったら、知恵を使って工夫すべき。

- 五十嵐 洋光台に箱が欲しい。学校の体育館でやったが、10月は行事が多く、貸してもらえない、11月になんとか借りることができたが、働き方改革で校舎は借りることができないので、着替えやリハールも近くの自治会館を使って、トイレは体育館のトイレだったので、休憩時間はトイレが行列になった。公会堂まで行くとなれない方ができるので、できれば街の中でやりたい。

- 森野 子どもたちの思い出になるような音楽祭を考えたら、磯子公会堂

- などでやるのもよいと思うが、学校が出向くかというハードルもある。
- 三上 30周年のときは公会堂で入れ替え制でやった。いずれにしても一度に入らないので、親は入れ替え制で、自分の子どもたちの時に入る。
- 森野 子どもたちに子どもたちの歌を見させてあげたい。小学生が中学校を見て、一中の吹奏楽いいとか、二中の木琴部いいということを経験させたい。
- 三上 音楽のつどいを目標にして、小学生が取り組む。1年から取り組んで、3年でつどいに参加する。それが出来なくなって子どもたちがかわいそう。

## キャンドルナイトとハロウィンのこと

- 小谷 キャンドルナイトは、港南台でやっていたのを洋光台でもやりたいと思って、洋光台エリア会議のワークショップで2013年に提案して始めた。運営も提案者がやるということで、駅前公園でやった。次の年もやりたいので、磯子区の地域運営補助金をもらって続けてきた。実行委員会方式で、メンバーは結カフェのメンバーなどが多い。地域の方に声をかけて、実行委員になってもらった。区役所にも参加してもらった。坂本さんも作りましたよね。
- 坂本 区役所で昼休みに職員と一緒に作った。
- 小谷 目的も、自分たちの街を知りたい、つながりを持ちたいと思った人が始めている。そのうちに、参加者が増えて、組織が大きくなり、運営もきつくなってきて、どうしようかというときに、コロナで中止になった。次の年に、このままあそこで大勢集めることに意義があるのかとメンバーの中で思う人もいて、自分の家でキャンドルのホルダーを三つでも四つでも作って飾る、そこで街のことを考えるという「おうちでキャンドルナイト」を始めた。それが、あちこちで少しずつ広がって、一昨年が10周年で、その時に中学生から社会人にかけて実行委員をやっている方が、どうしても駅前公園でやりたいということで、2022年に駅前公園でやった。私は、自分のやりたいところで、やりたい日にやるのもよいのではという思いもあって、自分のエリアでやっている。今年も駅前公園でキャンドルナイトはやって、それは続いていくと思うが、12月には5街区でやる。徐々にいろいろな街でやっていけばよいと思っている。
- 澁谷 コロナ前は、みんなで作ったものをみんなで駅前公園に持ちよるとい形だったが、コロナであちこちでやるようになって、自分たちの施設でできるようになった。参加する負担も楽になって、洋光台の全体の自治会や幼稚園・保育園で参加するようになって、わざわざ駅前公園に行かなくても、家の近所で見られるようになり、コロナがきっかけでいように変化したと思っている。
- 小谷 団地のキャンドルナイトの日程をずらしたおかげで、プレイパークのキャンドルナイトを手伝うことができた。その期間にどうしてもやらなくてもいいのかなと思っている。洋光台の土壤として、何か新しいことをやりたいと思ったときに、後押ししてくれる土壤がある。「そんなことをやっても」というのではなく、割と受け入れてくれる土壤があるので、キャンドルナイトができた。



小谷さん

- 五十嵐 以前は、音楽に強い先生がいて、洋光台全体の子どもたちの音楽を指導してくれたが、そういう先生がいなくなったのも大きい。まとめてくれる先生がいない。だから、ガラッと変えて、自分たちの校歌を歌おうとか、先生が引率しなくていいように、かつてにぎわいフェスタではソーラン節を有志で踊ったりしていたので、有志で参加もよいのではと思っている。それを出発点にして、学校の先生に見てもらいたい。
- 森野 大人がサポートにまわるという仕組みをつくらないといけない。コロナでイベントが途絶えて、引き継がれていない。そこも復活しなければいけない。



キャンドルナイト

- 森野 助成金などについても連合の相談役の松浦さんなどが探してきて、後押ししてくれる。キャンドルナイトやハロウィンについても、スタートして、しばらくすると皆さんいろいろな事情でちょっと疲れてくる、今までどおりにいかないというときに、コロナが始まって、見直しのいい機会になった。当時キャンドルについても松浦さんたちと話して、一か所でなくて、街のあちこちでやるのでいいんじゃないという話になった。言った手前、自分の自治会でもやるようになった。街のあちこちでいうときに、また駅前公園でもやるようになって、危ないというクレームもあったりして、少し整理も必要になってきた。外から見てかっこいいイベントも、やっている側で交通整理して、組織として継続できるものにしなないといけない。好きな人がやっているだけではだめ。
- 森野 ハロウィンについてもまちづくり協議会主催でやっているが、元は、こども科学館とサンモールさんでやっていて、URさんが加わって、そこでぎくしゃくしたりすることがあって。
- 三上 そういうことはちょこちょこあった。
- 森野 はたから見ると、洋光台のハロウィン楽しいねというけど、運営側から見るといろいろあって、コロナの時に交通整理することになった。キャンドルナイトと同じように、有志の方が忙しくて疲れてきた時期があった。そこに新都市さんが入ってくれて、新都市さんはイベントが得意でプロの人を入れてくれて、そうすると、新都市がやっているだけで、まちづくり協議会は名前を使われているだけという陰口もでてくる。コロナの時に、URをなだめて、まちづくり協議会主催でやっていきたい、と調整して、4年かけて、今年初めてお弁当も出してもらわないで、自前でやるということになった。こうすることで、10年でも20年でもやれるイベントにしたい。

## 洋光台が独立していること

- 三上 ケアプラザが洋光台地区に1館というのは、デメリットかと思っていたが、メリットなのかもしれない。
- 森野 北側の人からすれば、ケアプラザはなんで1館なのかというかもしれないが、1館ですごい戦力になっている。もし北と南にあつたら、連合も北と南に分かれていたかもしれない。
- 三上 私も、20年前ぐらいから、ケアプラザについては考えを変えて、ランチ機能の確保に切り替えて、URもその機能を確保してくれている。
- 澁谷 三上会長が言うってくれるので、我々もケアプラザの中にとどまることはせず、外に出ていく。駅前にあつたら胡坐をかいていたかもしれない。

- 三上 ケアプラザの立地は偏っているが、結果よかったかもしれない。
- 坂本 洋光台は、いろいろなことがそこで完結していて、エリア感が強い。
- 森野 洋光台は、地理的なことも含めて独立している。だから、洋光台の周年行事も、洋光台を作ってくれた先輩たちに感謝の気持ちをもってやらないといけない。そして、次の世代に引き継いでいく。



澁谷さん

澁谷 洋光台の自治会町内会や活動団体の皆さんが協力的で、こんなことをやってみようという皆さん協力的で、力を貸してくれる。

## トンボ池・プレイパークのこと



三上さん

三上 トンボ池は、30周年の時に各学校で子どもたちの夢として洋光台で欲しいもののアンケートをとったら、第1位が水辺、第2位が図書館だった。洋光台には川がなかったの、水辺が出てきたのではないかと。図書館はハードルが高かったの、ピオトープの勉強を含めて、土木事務所と一緒に作ることにした。子どもたちに夢を絵にしてもらい、それを専門家が図面にして、工事は自分たちでやったので、結局3年はかかった。人が寄り付かなかったところなので、オニヤンマがたくさんいたが、人の手が入って環境が変わった。

三上 プレイパークは土木事務所から話があって、港南台のプレイパークを勉強して、作った。運営は、洋光台独自の形でやっている。組織でプレイパークを始めたので、自治会町内会の協力も続いている。

澁谷 そこで、ママさんたちのつながりが出来て、子供が大きくなったときに、そのつながりで新しいことを始めるということも生まれている。トンボ池やプレイパークで遊んだ小学生が、お母さんになって子供を遊ばせている方も多い。

三上 泥んこになってトンボ池を作った子どもたちが、お母さんになって子供を連れてくるという良いサイクルになっていると思う。

森野 それが地域でやる一番の目的。洋光台は、大先輩たちが、洋光台文化創る会で洋光台を盛り上げてくれて、2000年代に洋光台まちづくり協議会ができて、その二つの組織がずっと洋光台を引っ張ってきている。洋光台まちづくり協議会があるからトンボ池やプレイパークが組織として動いている。

三上 やっぱり、組織をつくらなければだめ。

森野 洋光台まちづくり協議会には各自治会町内会長が入っているので、「あなたたち当事者なんですよ」と引き込むことができるし、これが、洋光台で継続してできている理由だと思う。

五十嵐 洋光台文化をつくる会のメンバーは今10人ぐらい。新しい方が入りにくい。えらい方が多いので、もっとハードルを下げる必要がある。

## これからのこと

小谷 キャンドルナイトをこれからもやっていく。きつずマーケットを10年くらいやっていたが、コロナでそれが中止になって、今回、洋光台子どもフェスタの中で、きつずマーケットをやって、子どもたちの元気な生き生きした姿をみて、これもケアプラザと一緒に続けていきたい。

五十嵐 今日の話の中で、洋光台文化を創る会がすごく頑張らなければいけないと言うことを強く感じた。自分たちは洋光台文化を創る会を作った先輩と若い方をつなぐ役割。若い人が受け継いでくれるような組織をつくる必要がある。

森野 先輩が作ってくれたものを、コロナを経験して、少しアレンジして、これからの洋光台の50年を担ってくれる人たちにバトンタッチする役目があると思っている。

細野 なんでこのイベントがあるのか、この組織があるのかとか、その背景などを学べる機会になって、身の引き締まる思い。私はコロナ禍以降を経験しているけど、その前にこういうことがあったということを知っておくべきだと思った。



細野さん

澁谷 ケアプラザのコーディネーターの立場としては、改めて、地域で活動されている方と一般の方をつなぐ立場なんだと思った。子どもたちへの種まきはもちろん、若い世代や中高年世代の方が何かに参加する一歩になる、その役割がケアプラザにあると強く感じた。

三上 私は建築家なので、物を作ってきた。地域における街づくり(ものづくり)については、私の場合はいろいろな場をつくることだと思ってやってきた。皆さんにとってやりやすい場さえ作れば、それを使って何かをやる、これをことづくりと呼んでいるが、皆さんうまくその場を使ってやってくれている。これからも、洋光台で場づくりをやっていく。

洋光台文化を創る会の元会長で、当時のことを知る森孝夫さんにもお話をお聞きました。洋光台男声合唱団やハモニカクラブにも参加している森さんは、後継者がいないとボヤキながらも、まだまだ元気に活動されています。

### 森さん談



「洋光台文化を創る会」は、中野堅五さんと当時の連合町内会長の佐野さんが中心になって、1983年(昭和58年)に発足した。洋光台は当時新しい街で、全国からそれぞれの文化を持った方々が集まっていて、この街を、文化をシンボルに、文化の街にしようという思いでこの会がつくられた。創る会のイベントである「洋光台音楽のつどい」は、学校の体育館を会場にトイレ対応や、学校の木琴部・吹奏楽部の楽器運搬が大変など苦労もあったが、子供と大人と一緒に参加する音楽祭は、私たちの誇りだった。創る会では「洋光台 美しい庭写真展」というイベントも20年近く続けている。後継者不足で大変だが、ぜひこれらのイベントを継続してほしい。

[令和5年度いそご文化円卓会議 地域編]

横浜市磯子区民文化センター

# 杉田劇場

[公益財団法人横浜市芸術文化振興財団/特定非営利活動法人チーム杉劇  
有限会社アイコニクス/株式会社ニックスサービス共同事業体]

〒235-0033 神奈川県横浜市磯子区杉田1-1-1 (らびすた新杉田4階)

TEL: 045-771-1212 FAX: 045-770-5656

Eメール: sugigeki@yaf.or.jp URL <https://www.sugigeki.jp/>